

神武天皇御陵之儀者、其方知行所内ニ被爲在、今度御修補ニ付、松材數本御用ニ相成、御満足被思召候、依白銀二十枚御所より賜候旨、傳奏衆被相達候間、此段相達候、尤銀子之儀者、御納戸頭申談、請取頂戴候様可被致候、

右二月廿七日○元治  
年

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年六月十六日、古來陵墓ノ不審ナルモノハ、決裁ヲ朝廷ニ請ヒ、安リニ慮斷ヲ以テ定ムル事ヲ禁ズ、

山陵御修補に付、元來御場所未定の分、此節専ら探索方仰出され候處、兼て異論の御場所、爲鑑定穿ち候様有之哉に相聞候、尊重の御場所、一己の存寄を以て勝手拜見のみならず、右様所業をして窺定候儀、恐懼の至に思召候間、以後異論の御場所は、山陵奉行へ申出、同向々に於て一同立會、篤と敬見遂評議候上にて、彌難決候は朝廷へ被相伺、御差圖受候様可致候、今般先帝爲御尊崇奉行被仰付候儀に付、都て山陵に拘り候御儀は同向へ申出、差圖受候様可致、一己の存寄を以て、妄に山陵へ手を附候儀は、決て不相成候、御尊崇難相立候間、心得違無之様可致候、且又國々皇子皇后等の御墓、其外重き身分の墓所々右様の類、以後大切相心得、破壞不致様被仰出候、右之趣末々不洩様急度可申達事、

右之通京都より被仰出候間、諸國津々浦々に至る迄、不洩様早々可相觸候、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年丙寅三月廿日戸田大和守諸侯ニ列ス

野州宇都宮城主戸田土佐守高の内七千石、新田三千石、都合一萬石、家族戸田大和守へ分地いたし、御奉公爲相勤度、且大和守取來、二百人扶持差上度旨、願之通被仰付、席の儀は菊之間縁頬と可被心得候、右於芙蓉之間老中列座、和泉守申渡之、  
此は文久二壬戌閏八月、宇都宮侯内願に依て、御陵修補御用命せられ、家老間瀬和三郎、重立是